

聖書:第一列王記18章1～15節

説教:わたしはこの地に雨を降らせよう

はじめに

イスラエルが二つの国に分裂した後、北王国イスラエルの七代目の王となったアハブは、外国からイゼベルという名の妻を迎え、イゼベルが拝んでいた五穀豊穡の神であるバアル神を自分も熱心に信じるようになります。これをご覧になっていた主は、あるとき預言者エリヤをアハブの前に遣わし、「私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない」と言わせます。怒ったアハブ王は彼を殺そうとするのですが、エリヤはツアレファテと呼ばれる外国の町に逃れ、そこにいたある一人のやもめの世話を受けながら身を隠すことになりました。ところがあるとき、そのやもめの息子が病気で亡くなってしまいます。やもめは神に怒りをぶつけるのですが、エリヤの祈りを通して子どもが生き返るといふ奇蹟を見て、やもめの霊の目が開かれ救い主を信じていきました。それが前回までのあらすじでした。

今日の箇所は、エリヤがのことばのとおりにはマリヤ地方に雨が全く降らない状態が三年半続き、大飢饉になったところから始まります。そのとき神はどうされたのか。ともに見てまいります。

1 信仰者オバデヤ

1) アハブ王に仕える

アハブは豊作の神バアルに何度も雨乞いをしたでしょう。しかし雨はいつこうに降る気配がない。飢饉がますますひどくなるばかり。そこでアハブは、宮廷長官オバデヤと手分けをして水と草を探すことにします。

このオバデヤのことについては3、4節に説明があります。「オバデヤは主を深く恐れていた。かつてイゼベルが主の預言者たちを殺したときに、オバデヤは百人の預言者たちを救い出し、五十人ずつ洞穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養ったのである。」

主を恐れていた信仰者が、バアル神を拝む主人アハブに宮廷長官として仕えるだけでも大変なことです。それがあるとき、アハブの妻であったイゼベルが、主の預言者たちを全員皆殺しにするように命令を出す。オバデヤは事前にこの情報をキャッチし、どうするか判断を迫られます。すぐに主の預言者たちを集めて洞穴に隠し、パンと水で養うように取り計らうことにした。その数は百人であった

とあります。もし王の目に見つかれば殺されます。彼はいのちをかけて自分の信仰を守り通しました。

2) 「私のしたこと」

そのオバデヤの前にエリヤが現れ、このように語ります。8節。「行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言いなさい。」これを聞いたオバデヤは恐ろしくなります。自分がアハブ王のところに行ってエリヤのことを知らせている間に、エリヤはきつといなくなるに違いない。そうなれば、自分は殺される。それで9節でこう言うのです。「私にどんな罪があるというのですか。あなたがこのしもべをアハブの手に渡し、殺そうとされるとは。」それだけではなく13節でも、「イゼベルが主の預言者を殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか」とも言う。

皆さんこれを聞いてどう思いますか。オバデヤのことばに嘘はありません。そのとおりなのです。でもなんだか不自然に聞こえませんか。彼は主を恐れる信仰者でした。でも、ほんとうの信仰者なら、主のために自分がやったことをこんなふうに強調するでしょうか。アハブに殺されるのを恐れて、それで弁明したいという気持ちはあったのでしょうか。それにしても何かすっきりしないものを感じます。そのことはまた後で触れることにします。

3) なぜオバデヤなのか

疑問はそれだけではなくて、もう一つあります。単純なことです。なぜエリヤはオバデヤに会いに行ったのでしょうか。主の命令はこうでした。1節「アハブに会いに行け。」であれば、直接アハブの所に行けば良い。アハブの居場所がわからなかったのでしょうか。では、どうしてオバデヤの居場所はわかるのでしょうか。何か変です。アハブに殺されるかも知れないと恐れていたオバデヤを、わざわざ呼びに行かせるのはなぜか。必ず何か意味があるに違いありません。

2 怒るオバデヤ

1) 主の預言者が殺された理由

そのことを考える手助けとして最初に二つのことを確認します。その一つ目が、なぜイゼベルが主の預言者を殺したかです。ここには理由については何

も書かれていません。あまりにも理由が明かだからです。エリヤが「ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない」と言ったら本当に雨が降らなくなりました。バアルを信じるイゼベルからすれば、エリヤは天地にわざわいをもたらす邪悪な神々の手先なのです。雨を降らせるためには、邪悪な神々を地上から消し去る必要がある。それでエリヤを殺そうとする。ところが彼は姿を隠したままです。それではということで、代わりに主の預言者たちが殺されことになってしまったのです。

2) 預言者はパンと水で養われた

二つ目に確認することはエリヤ自身のことです。オバデヤは13節でこう語っていました。「あなたには、イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか。私は主の預言者百人を五十人ずつ洞穴に隠し、パンと水で彼らを養ったのです。」

エリヤにとってこれはまったくの他人事ではありません。三年半前、エリヤはアハブに、「私のことばによるのでなければ雨が降らない」と語って殺されそうになったとき、主はこう言われた。

「いますぐケリテ川のほとりに身を隠しなさい。あなたは川の水を飲み、鳥が運んでくるパンと肉で養われる。」で、実際そうになった。そうして半年そこで過ごして、川の水が涸れるとこんどは、「ツアレファテの町に住む貧しいやもめがあなたを養うようにしているから」と言われて、やはり実際そうだったわけです。エリヤ自身も鳥から、あるいはやもめから食事を与えられて生き延びたという経験をしている。ですから、オバデヤの苦労がよくわかる。そしてその原因を作ったのはやはりエリヤなのです。

3) 怒る理由

今二つのことを確認しました。主の預言者が殺されたのは、エリヤがアハブに語ったことがきっかけです。オバデヤがいのちの危険を顧みずに主の預言者をかくまったこともエリヤに関係していた。そうするとオバデヤが、突然目の前に現れたエリヤを見たときどう思ったでしょう。もちろんオバデヤは信仰者ですから、口では「あなたは私の主人エリヤではありませんか」と言っています。でも、9節以降のオバデヤのことばはどうですか。なにか彼の中にある怒りが伝わってくるのではないか。「あなたは外国に姿を隠して気楽だったかも知れないけれど、あなたがいない間、自分たちはどんなつらい思いをしなければならなかったのか

あなたは知っているのか。それが今頃帰ってきて、私に危険なミッションを与えようとするのか。」

オバデヤがなぜ13節のように自分のしたことを強調するのか、それがすつきりしないと先ほど言いました。エリヤに対する怒り、そしてエリヤとともにおられる神に対する怒りがあるからなのではないでしょうか。

3 神

1) 「必ず、今日、アハブの前に出ます」

そんなオバデヤの訴えを聞いてエリヤは15節でこう答えます。「私が仕えている万軍の主は生きておられます。私は必ず、今日、アハブの前に出ます。」自分はいなくなったりしない。必ずアハブの前に出るから、と約束する。それでオバデヤはアハブを連れてくる決心をした。それがここに書かれていることのすべてに見えます。

でも、オバデヤが神に対する怒りをうちに秘めていたことを考えるなら、エリヤは何を言ったことになるか。アハブは必死になってエリヤを捜し出し殺そうとしていました。そこへ、エリヤのほうから自分の居場所を教えてアハブに姿を見せる。殺されてもかまわないという覚悟ができていなければ、「必ず、今日、アハブの前に出ます」とは言えません。

オバデヤはずっと思っていました。自分はいのちをかけて主のために戦ってきた。でも肝心のエリヤは姿を隠し、エリヤは何の苦労もしない。いっぽう主の預言者も次々と殺されていく、それなのに神は何も助けてくれない。神はどこにいいのかと叫び、怒りをぶつけていた。ところが今エリヤの覚悟を聞いたとき、オバデヤは、神のみこころを初めて知ることになりました。神は決して逃げたのではない。神は自分たちと苦しみを共にされ、私たちを救うために戦いの前面に出て、いのちをかけて敵と戦ってくださる。それがわかったとき、オバデヤからは怒りは消え去り、すべてを主にゆだねる者と変えられていきます。

なぜ、エリヤはオバデヤに会いに行ったのか。これではつきりしました。苦しむ信仰者を励ますため。いや、それ以上です。神を信じる者に、もっとご自分の姿を見えるようにしてくださろうとした。神は怒りをぶつけるオバデヤを愛しておられます。

2) 雨を降らせよう

アハブの犯した罪のために神は三年半の間、雨が降らないようにしました。しかしいつまでも雨を降らせないのではない。不思議なことに、神はあ

るとき思い直すのです。「わたしはこの地の上に雨を降らせよう」と言ってくださるときがくる。もし神がこう言ってくださらなかったなら雨はいつまでも降らず、人々は死ぬしかなかったでしょう。雨が降らず大飢饉のさなかにいるようなこの罪の時代に生きている信仰者は日々戦いに直面します。主よ、なぜですか。主よ、まだですか、と叫び、神に怒りをぶつけたくなるときもあります。

でも今日の箇所から教えられる。神は決して私たちを忘れたのではない。むしろ、私たちのそばにおられて、神がいのちを捨てて敵と戦おうとしておられる。それがどのようにしてわかるのか。

もし父なる神が、イエス・キリストをこの罪の世に降そうとされなかったなら、私たちの望みはどこにもなく、ただ滅び去るしかありませんでした。ところが、罪を犯し続ける私たちでありながら、神は思い直してくださって、神ご自身が私たちと苦しみをとものにされ、そればかりではなく、十字架でいのちを捨てて罪の身代わりとなり、三日目によみがえられた姿を現すことで、私たちの罪が完全に赦されたことを示してくださいました。

エリヤの時代から変わらずに救いの手を差し伸べてくださる主の御名をあがめます。